



活動報告 矢口教育学研究の4年間

能力開発工学センターの創立者矢口新（やぐちはじめ 1913–1990）は、社会の課題に主体的に取り組む実践人の育成を目標にその具体的な方法を開発した教育研究者である。その仕事と思想を後世に伝えたいと「矢口教育学研究会」を始め、早や4年がすぎた。

矢口の研究活動は東京帝国大学卒業（1927年）と同時に始まっているが、矢口とともに活動した関係の方々存命でお話が伺える戦後初期 1940～50年代に焦点をあてて研究を進めている。茨城県水海道小学校と富山県北加積小学校での実践、続いて 1951年から参画した富山県総合教育計画の策定について、聞き取り調査と関連する資料（カリキュラム、指導案、教材など）を収集した。

発見された膨大な資料群と、聞き取り調査の整理分析はまだ続いているが、その過程で、矢口が目指したもののやその研究姿勢が、実像として浮かび上がってきている。水海道小での、2紙で競争する会社組織の学校新聞、学校のハ工退治から地域の環境へと関心を広げる保健部の活動などの児童の自治活動、北加積小での地域や生活の課題に取り組む学習など、子どもに現実を見る目を持たせ、課題を探究する力を育てる指導が行われた。当時の教員への聞き取り調査から明らかになったのは、仲間と一緒に考え行動して学ぶことの重要性を、そして生徒の前にまず教師自らが課題を探究する姿勢を持たなくてはならないことを学んだということであった。カリキュラム作りで行き詰まり矢口に答えを求めたある教師は「…僕も一緒に考えているんだよ」と云われたことを今でも覚えていた。

「社会の課題に主体的に取り組む実践人の育成」という矢口の教育の考え方は常に一貫し、それは現在の教育課題の解決に多くの示唆を与えてくれる。富山県の総合教育計画においては、矢口は県勢の実態と将来構想をふまえ、目標となる人間像を地域の建設者とした。社会に出て様々な場で仕事をする人間を育てるために「教育に産業性を付与する」という方針を掲げ、職業高校の比率を高くし、産業教育館を始めとする学校と産業の現場を結びつける様々な計画を進めた。学校と仕事の接続が大きな教育課題になっている今、その先見性を再評価すべきであろう。

研究メンバーの一人である越川求（こしかわもとむ・立教大学大学院後期博士課程・教育史）は、矢口研究会の調査や討論を土台に、矢口の実践が教員の力量形成に及ぼした影響と、我が国最初と言ってよい総合的地域教育計画である富山県教育計画の意味に特に注目し、下記のように学会発表をしている。

- ・「戦後教育改革期における教員の力量形成—水海道小教師と国立教育研究所矢口新とのかかわり—」日本教師教育学会 08.9
- ・「矢口新の教師教育論—富山県北加積小の実践から—」日本教師教育学会 09.10
- ・「1950年代から60年代の地域教育計画論の歴史的展開—矢口新の地域教育計画の実践を中心に—」教育史学会 09.10
- ・「富山県総合教育計画と社会教育計画」日本社会教育学会 10.9
- ・「矢口新の教師教育論—国立教育研究所・能力開発工学センターにおける実践を手がかりにして—」日本教師教育学会 11.9
- ・「戦後カリキュラム改革と自治活動—1950年代茨城県水海道小の実践を中心に—」教育史学会 11.10

（ 榊 正昭 ）

●矢口教育学研究会、発足しました

このたび、思いがけないことから「矢口新先生の業績を研究したい」という人間が集まり、「矢口教育学研究会」（仮称）を立ち上げることになりました。

思いがけないことというのは、立教大学大学院後期博士課程の越川求氏から能開センターに、矢口先生の著作および関係資料の問い合わせがあったことです。越川氏は、現役の中学校教諭でありながら、大学院で教育史の研究を続けているというエネルギーのある方です。もともとは、コミュニティスクールや開発教育に関心をもって調べているうちに、埼玉県比企郡の地域教育計画「三保谷プラン」*を知り、「矢口新の教育学」にめぐり合ったということです。

*三保谷プラン：川口プランや水海道小学校、富山県北加積小学校での実践と並ぶ戦後まもなくの地域教育計画の一つで、当時中央教育研究所のメンバーであった矢口先生がその指導に当たっていました。

去る5月5日、越川氏の求めに応じて、矢口みどり、榊正昭、小澤秀子の3人が集まり、当時の矢口思想を知るための資料（主に多数の雑誌論文）をもとに、意見交換を行いました。話し合ってみると、矢口新を研究することが、単に過去を静的に研究することにとどまらず、現在および未来に働く思想と方策を明らかにできるという思いが4人に共通していることがわかり、この思いを確信に変え、いずれは何らかの形で発表するために、継続的に「研究会」を持つことを決定しました。

当面の「研究会」の進め方は、下記のとおり。

①毎月1回ぐらいの会合をもつ。原則として土曜日か日曜日。

②場所は、矢口文庫（埼玉県新座市新堀2-1-7-603、西武池袋線清瀬駅から徒歩10分）

③越川氏の研究発表に備える必要から、まず1955年頃までの矢口新の業績をとりあげる。

この時期の実践が矢口教育学の原点ではないか、との思いもあります。研究会の活動は、ブログ：矢口教育学研究会のページに随時報告していきますので、ご覧ください。

[<http://blog.goo.ne.jp/hykenkyu0755>]

<O>

矢口教育学研究の4年間



能力開発工学センターの創立者矢口新（やぐちはじめ 1913-1990）は、社会の課題に主体的に取り組む実践人の育成を目標にその具体的な方法を開発した教育研究者である。その仕事と思想を後世に伝えたいと「矢口教育学研究会」を始め、早や4年がすぎた。

矢口の研究活動は東京帝国大学卒業（1927年）と同時に始まっているが、矢口とともに活動した関係の方々が存命でお話が伺える戦後初期 1940～50年代に焦点をあてて研究を進めている。茨城県水海道小学校と富山県北加積小学校での実践、続いて 1951年から参画した富山県総合教育計画の策定について、聞き取り調査と関連する資料（カリキュラム、指導案、教材など）を収集した。

発見された膨大な資料群と、聞き取り調査の整理分析はまだ続いているが、その過程で、矢口が目指したもののやその研究姿勢が、実像として浮かび上がってきている。水海道小での、2紙で競争する会社組織の学校新聞、学校のハ工退治から地域の環境へと関心を広げる保健部の活動などの児童の自治活動、北加積小での地域や生活の課題に取り組む学習など、子どもに現実を見る目を持たせ、課題を探究する力を育てる指導が行われた。当時の教員への聞き取り調査から明らかになったのは、仲間と一緒に考え行動して学ぶことの重要性を、そして生徒の前にまず教師自らが課題を探究する姿勢を持たなくてはならないことを学んだということであった。カリキュラム作りで行き詰まり矢口に答えを求めたある教師は「…僕も一緒に考えているんだよ」と云われたことを今でも覚えていた。

「社会の課題に主体的に取り組む実践人の育成」という矢口の教育の考え方は常に一貫し、それは現在の教育課題の解決に多くの示唆を与えてくれる。富山県の総合教育計画においては、矢口は県勢の実態と将来構想をふまえ、目標となる人間像を地域の建設者とした。社会に出て様々な場で仕事をする人間を育てるために「教育に産業性を付与する」という方針を掲げ、職業高校の比率を高くし、産業教育館を始めとする学校と産業の現場を結びつける様々な計画を進めた。学校と仕事の接続が大きな教育課題になっている今、その先見性を再評価すべきであろう。

研究メンバーの一人である越川求（こしかわもとむ・立教大学大学院後期博士課程・教育史）は、矢口研究会の調査や討論を土台に、矢口の実践が教員の力量形成に及ぼした影響と、我が国最初と言ってよい総合的地域教育計画である富山県教育計画の意味に特に注目し、下記のように学会発表をしている。

- ・「戦後教育改革期における教員の力量形成－水海道小教師と国立教育研究所矢口新とのかわり－」日本教師教育学会 08.9
- ・「矢口新の教師教育論－富山県北加積小の実践から－」日本教師教育学会 09.10
- ・「1950年代から60年代の地域教育計画論の歴史的展開－矢口新の地域教育計画の実践を中心に－」教育史学会 09.10
- ・「富山県総合教育計画と社会教育計画」日本社会教育学会 10.9
- ・「矢口新の教師教育論－国立教育研究所・能力開発工学センターにおける実践を手がかりにして－」日本教師教育学会 11.9
- ・「戦後カリキュラム改革と自治活動－1950年代茨城県水海道小の実践を中心にして－」教育史学会 11.10

（ 榊 正昭 ）

『近代教育が作り出せない人間像』*

能力開発工学センター客員研究員 榎 正昭

30年前に書かれたこの小論には「社会の転機と教育の転換に関する覚書」という副題がついている。

矢口は言う。「新たな人間像の育成がさまざまな形で主張され要請されていることは衆知のことである。しかしそれが単なる願望に終って、具体的な姿をとって現実化しないのはどうしてであろうか。」問題は教師が教科書で教科を教えるという近代 100 年の教育の構造にあるとし、その構造が当時の公害問題、自然破壊、汚職事件などを生み出す地盤ともなっていると述べている。この指摘はイジメ問題や必修科目履修漏れなど今日の問題に置き換えて読んでも全て当てはまる。「現代の学習は、場のダイナミックスの中での人間の形成を忘れた抽象的観念の産物としての学習である」という指摘も、今日の教育問題への警鐘となっている。

今日の教育改革の方向が多くの人々の共感を得ないのは、教育の目標とするものが、教育における問題や現代社会のさまざまな問題の克服につながるという確信を持ってないからではないだろうか。矢口は、教育の目指すべき方向について、公害、自然破壊、汚職など社会の問題を自ら克服する人間を目標として、「生活を通じて生活することを身につけながら、より幅の広い生活圏へと広がり行く、より複雑な行動の場を展開することが新たな学習システムの開発の方向であろう」と述べている。社会の中で生きる人間の行動力としてとらえ、育てるべきだと言っているのである。

* 矢口新選集第3巻『探究的行動力を育てる学習システム』所載
(1993年 (財)能力開発工学センター刊行)